

Title	小池さんの死を悼む
Sub Title	
Author	前原, 光雄(Maehara, Mitsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1977
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.50, No.6 (1977. 6) ,p.88- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小池隆一先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19770615-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小池さんの死を悼む

前原光雄

昭和五十二年四月十七日に小池さんが逝去された。痛恨の極みである。大正十四年以来私とは約五十二年間の交遊であった。小池名誉教授、小池博士等々と呼ぶよりも、私には、「小池さん」というのが一番びたりとする呼び方である。私よりは四年の先輩である。大正十四年に私が法学部の助手となつた頃には、小池、峯岸、永沢の三先輩が助手をして居られた。峯岸さんは大正十一年の卒業であり、永沢君は大正十三年の卒業で、小

池さんは当時は最古参の助手であつた。その後大正八年の卒業で民間の会社（古河）に就職していた浅井清さんが法学部の助手として復帰し、潮田君（卒業すれば大正十二年卒業だが卒業前に外

国に留学）、島田君（大正十三年法学部政治科卒業）はフランスに留学中で、私が学校に残つた頃は小池、峯岸、永沢と私の四人が居り、その最古参は小池さんであつた。この中で峯岸さんは昭和十五年他界され、その後、島田、潮田、永沢の順で逝去せられ、大正の卒業生で、その当時いた人の中で、現在生存しているのは浅井さんと私だけになつた。身辺とみに寂しさを覚える。私より一年後の卒業生では、津田、宮崎、今泉の諸君がなお健在であるが、この次は私の番ではないかとひそかに想つている。

それはとにかくとして、小池さんの人となりは温厚そのものであることについては異論のないところであらう。温厚な先輩ということでは私は非常に気が楽であつた。つまり気を使わないですむということである。尤も専攻は小池さんは民法であるし、私は国際法で、全く無関係の科目ということもある。それにしても、四年も先輩でありながら、先輩顔をして接するということは皆無であつた。このためか一度も衝突したことはなかつた。全く気のおけない先輩であつた。五十年以上という永い交際の中で不愉快な思いをしたことは一度もなかつた。恐らくこれは

私だけではなく、小池さんに接したことがある先輩、同僚に共通することではないかと思う。これは小池さんという人が、どんなに温厚な人であつたかということの証拠である。

小池さんはフランス法を中心とする民法の研究だつたので、フランスに留学せられた。留学期は私とはずれていたため滞仏中のことは私にはよくわからないが、浅井、峯岸両氏とは留学期が或る期間重複していたので、その両氏から断片的に小池さんのエピソードを聞かされたことがある。その中に、小池さんは「バロン・コアク」（Baron Koike）つまり「小池男爵」とモンパルナスあたりで呼ばれていたとのことである。なぜそうなつたのか理由は覚えていないが、一笑話としての価値はあるであらう。ついでに小池さんのくだけた一面を記したいと思う。

小池さんとは酒席を共にしたことは何度かあつた。その時には、いろいろな種類の歌を披露された。民謡、俗曲等が中心であるが、私の記憶に残っているのは、たんかい（淡海）とよばれる俗曲の一つである。たんかいにはいろいろな名文句があるし、節も仲々いいと思う。その一つを紹介すると、「思い切れとは、そりやあなた無理よ、思い切れるよな仲じやない、それとも死ねとの謎かいな」。これはわれわれ老人には名文句に思えるが、若い人の感じはまた違うことであらう。

小池さんの経歴をふり返つてみると、終戦後新学制が敷かれ

て慶應でも高校を設けねばならぬことになり、慶應高校の初代校長は、経済学部の寺尾琢磨君になつたが（最初は麻布三の橋の仮校舎で開校、後に日吉に移転）、次の校長は小池さんであつた。

高等学校校長を二期（四年）勤められ、法学部長も二期（四年）勤められた。慶應を定年になられてから山梨学院大学の教授として勤務せられていた。住居が遠いのでお目にかかるチャンスが少く歳月が過ぎたが、今春重体になられて赤羽橋の済生会中央病院に入院せられていることを聞き、三月十七日に赤羽橋の中央病院に御見舞に伺つた。意識不明に陥つていられるとのこと、とてもお話はできないものと覚悟していたが、幸運にも私が見舞つたときは、意識がはつきりして居られ、附添いの方が支えられながら椅子にかけられたまま、ちよつとお話しをすることができ、私は幸運であつた。その後、町田の病院に移られ、そこで逝去されたとのことである。

小池さんは学者として正常な生活を送られ、生活そのものの中に波乱はなかつたようである。性格的にも穏健な人で突飛な行動はなかつたと思う。このような人について、その想い出を記すことは仲々むずかしい。小池さんの追悼文を書く者として果して私が適任者であるかどうかを反省している。また思い出すままに書いたので、内容が在りし日の小池さんを多少でも伝え得たかどうか？ 御遺族に対し礼を失することはなかつたか？

などについても心配している。心から御冥福をお祈りする次第である。